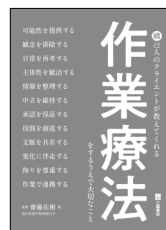


齋藤佑樹（著）

続 12人のクライアントが教えてくれる 作業療法をするうえで大切なこと

京 極 真
（吉備国際大学、作業療法士）



本書は『12人のクライアントが教えてくれる作業療法をするうえで大切なこと』（三輪書店、2019）の姉妹本である。前著にもまして「読み終えるのがもったいない」と感じるぐらい、味わい深い作業療法のリーズニング集として仕上がっている。本書を読めば、読者はOTとしてどのように考えるのかを考えるヒントを学べると思う。それによって、読者のリーズニングの成熟が促されることになるだろう。とにかく多くのOTに読んでもらいたい。

1980年代前半にJoan C. Rogersら¹⁾が鋭く指摘したように、実のところ当時、OTには自らの実践でどのように考えているのかを明確に言語化できないという問題があった。たとえば、OTにクライアントの問題と目標を特定する手順について問うても、その理由を分析的に答えられないのだ。それではマズいということで、1980年代後半～1990年代半にかけて、リーズニング研究が活発に行われるようになった。

しかし、それでも上記の問題の根は一部に残ったままであると思う。たとえば現在でも、OTにクライアントの生存、健康、幸福に

関与する作業についてどのように考えているのかを問うても答えられないことがある。リーズニング研究は、研究としては期待以上の成果を上げること成功したと思うが、個々人のOTをみると、メタ認知的議論の言語化に苦戦しているケースが今でも散見される。

そうした事情を踏まえると、本書がすごい本だということがわかると思う。1つは、OTである著者がクライアントを通してどのように考えているのかを明確に言語化していること、もう1つは、作業療法のリーズニングをわかりやすく例示していること、である。著者のリーズニングは、時に大胆に、時に繊細に展開している。OTは、生存、健康、幸福の基盤に作業があるとわかっていても、日々の臨床で目の前のクライアントに対してリーズニングする際につまずくことがある。そのとき、本書は添え木の役割を果たす。

本書は挑戦的な書であるが、その構成は全12章である。各章では、最初に印象深いクライアントのエピソードが紹介され、その後著者がクライアントから教えられた作業療法の本質を解説する構成となっている。縦横無尽に展開

する議論は、読者に作業療法のリーズニングとは何たるかを過不足なく伝えている。また、著者は、読者の理解を促すために、最初に紹介したクライアント以外のエピソードも豊富に紹介している。したがって、本書は「12人のクライアント」と表題に掲げているが、実際にはもっと多くのクライアントから教えられた作業療法の本質を解説する仕掛けとなっている。

本書を読み終えたとき、あなたは日々の臨床でどのように考えるようになっているだろうか。それは、クライアントの生存、健康、幸福を育む作業を通して支援するものになっているだろうか。

文献

- 1) Rogers JC, et al : Clinical reasoning of occupational therapists during the initial assessment assessment of physically disable patients. OTJR : Occupation, Participation and Health : 1982, doi. org/10.1177/153944928200200401

A5判 110頁 2,000円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357